**編集後記**：編集委員会では記事の内容と季節が合うように『天気』への掲載月を決めています（例えば，先月号の気象談話室の雷雨の話）．その際，極力，著者の希望に沿うように編集していますが，編集上のタイムリミットも有りますので，それを知っていると投稿される場合に役立つかも知れません．この『天気』7月号の場合，主原稿（論文，解説，シンポジウム，気象談話室，カラーページ，本だな，等々）は5月の中旬に締め切り，それ以外のいわゆる埋草記事は6月中旬に締め切ります．更に印刷して郵送するまで2か月ほどかかり，8月上旬に皆さんの手元に届きます．他の号でも同様のスケジュールで動きます．

今月号が皆さんの手元に届く頃，時候の挨拶は「残暑厳しい…」と「米の不作が心配される…」のどちらでしょうか．『天気』の性格からか，実際に読者が本誌を手にする時の天候はどういう塩梅だろうかと気になります．上で明かしたタイムリミットから分かるように，これを書いているのは関東地方が梅雨入りするかどうかという6月の上旬です．梅雨と言えば今年から梅雨入り日や梅雨明け日の宣言がなくなり，旬単位で「梅雨入りしたと見られる・明けたと見られる」という発表に切り替わるとのこと．1週間ほど経ってから元の天候に戻ることもある訳ですから，判断を下す時間的な余裕ができて気象庁の担当官の苦労が軽減されるかのように思えます．一方，ビール業界や家電業界は梅雨明け宣言後の売り上げが急上昇するために（お上の発表でビールを飲んだり，エアコンを買ったりというのも情けない気がしますが）1日も早い梅雨明け宣言を熱望しているわけで，前よりも梅雨明け発表の時間的遅れが生じるため逆に担当官への心理的プレッシャーは増すのではないかとも考えられます．

気象談話室担当になって3年が経ちました．担当し始めた頃に比べて，気象談話室の掲載回数が格段に増えました．原稿依頼や査読に当たる「教育と普及委員会」の担当者の意欲はもとより，投稿される皆さんの御協力によるものと感謝しています．時には，読者の皆さんや投稿者から苦情・意見が寄せられることもあって考え込むこともありますが，冷えた麦茶でも飲みながら楽しく読めるような記事をお送りできればと思っています．

（補：つい先頃，九州から東北まで梅雨入りした模様という発表がありました．部外者にとっては，時間のみならず空間的な範囲まで一気に幅・余裕が生じた印象を受けますが…?）　（大泉三津夫）

---

## 訂　正

42巻6月号406頁編集後記の日本気象学会1995年度春季大会に関する記述の中で，「303件の発表があり」を「303件の**口頭**発表があり」と訂正させていただきます．

---